

## 日本・中国・米国の学生が重視する主人公の特徴

— 中間報告 —<sup>1</sup>

東京外国語大学                    上 原                    泉  
清泉女学院大学                    東                        洋

### What aspect of heroine is valued?

: An examination of differences among Japanese, Chinese and US students.

Tokyo University of Foreign Studies      UEHARA, Izumi  
Seisen Jogakuin College                    AZUMA, Hiroshi

物語作成の際に、女性主人公のどのような側面を重視するのかについて、主人公の特徴を示す 32 項目からなる質問紙を作成し、日中米の学生間で違いがあるのか否かを検討した。ここでは、それぞれの項目が、物語を作成する上でどれくらい重要だと思うかを、対象者に 3 件法で評定させた。日中米のデータをあわせ因子分析を行ったところ、「プロフィール・履歴書因子」「成功者因子」「近親者との関係因子」の 3 つを抽出した。因子得点で比較すると、「プロフィール・履歴書因子」の得点は日本において他 2 国よりも有意に高く、「成功者因子」の得点は日中の得点が米国よりも有意に高かった。

また、項目ごとの評定の結果や 32 項目から特に重要な 5 項目を選択させた結果についても検討したところ、重視する項目に、日本と中国の学生の間で異なる傾向があることを確認した。

**【キー・ワード】日中米比較, 人物スクリプト, 物語作成**

To investigate what aspect of heroine is valued in three cultures, Japan, China and US, we asked the Japanese, Chinese and US undergraduate students, through questionnaire, to rate each of 32 items how important for making a story. The answer was made on a 3-point scale: Most important (3), Less important (2), and Least important (1). We conducted the factor analysis for the data and found common 3 factors: Factor 1(Profile or Personal history), Factor 2(A success), and Factor 3(Close relationship). The result showed that while the Japanese tend to value Factor 1(Profile or Personal history) more than the Chinese and US students, both the Japanese and Chinese tend to value Factor 2 (A profile or a personal history) more than US students. Additional analyses also indicated another differences in answer between the Japanese and Chinese students.

---

<sup>1</sup> 本論文は、上原・東 (2005) のデータの一部と新たに加えた米国のデータをあわせてまとめた中間報告である。

**【Key Words】 Cross-cultural comparison, Character script, Story-making**

**はじめに**

古くから伝わる物語については、小澤（1976）や河合（1982）で説明されているように、物語の内容や記述のされ方に、日本と他の文化圏との間に違いがあることがわかっている。しかし、近年では、他の国の映画や小説、ドラマなどの作品に触れる機会が多く、文化圏間で共有する物語の数は増えてきている。そのため、人々が好む物語の展開のされ方やヒーロー、ヒロイン像、物語に対しても感想、また、物語はこう記述されるべきだという認識に、文化や国の違いによる差はほとんどなくなりつつあるような印象を持つかもしれない。実際はどうか。

人が様々な場面でどう物語るか、あるいは、どう物語るのが常識とされているかの文化差については、東を中心とする研究グループにおいて、スクリプトの違いという視点からこれまで追究してきた。ここでいう「文化」とスクリプトの関係についての、本著者らの考えを簡単に述べておく。

各人が発達の過程において、様々な文化的要素を持ち合わせる形で、自分独自の文化環境を有するようになる。その個人の集まりである集団の文化は、流動的で、必ずしも固定化されたものではないため、異なる集団文化間で容易な比較はできないだろう（東，2003）。だが、個人が幼少期から長期にわたり同じ集団文化内で生活していれば、所属集団内で共有されるような、ある種の認知的枠組、詳しくいうと、日常的な出来事の進行経過に関する常識的な筋書きの知識（ライフ・スクリプト）を身につける（Azuma, 2006）。所属する集団文化自体が流動的であるため、ライフ・スクリプトも変化していく可能性はあるが、そのライフ・スクリプトは社会生活を営む上での了解事項として機能しているため、急激に変化するようには思われない（上原・東，2005）。異なる集団文化間では、そのスクリプトの分布が異なっており、それが同じ出来事に対する見方や感じ方、説明の仕方の違いとして現れるのではないかと本著者らは考えている。

そうだとすれば、日常的な出来事の知識に基づき作られる物語においても、従来ほどではないとしても、面白いとされる物語、支持されるヒーロー、ヒロイン像、期待する主人公の記述のされ方に、文化圏間で違いがある可能性は高い。

本稿では、物語の主人公の記述のされ方に焦点をおき、物語を作成する立場になったときに、面白い物語にするために、主人公のどのような側面を重視するのか、主人公についてどう描くのがよいと思っているのかについて、日本、中国、米国の間で違いあるのかを検討することとした。

**方 法**

**対象者**

上原・東（2005）で収集した日中の大学生のデータに、米国の学生のデータを新たに加え分析の対象とした。内訳は次のとおりである。日本人大学生 235 人（男子学生 102 人，女子学生 133 人），中国人大学生 81 人（男子学生 40 人，女子学生 41 人），米国人大学生 65 人（男子学生 34 人，女子学生

31人)<sup>2</sup>であった。

### 課題

質問紙調査を行った。質問紙は5つの設問からなり、本調査に関わる設問はそのうちの1つであった。調査は無記名で実施されたが、質問紙の最後で、性別、兄弟構成、出身地域、学歴に関する記入を可能な範囲内でもとめた。

本設問内容は“物語を作成するのに、主人公の特徴として示した32の情報がどれくらい重要だと思うかを3段階（1：重要でない。2：どちらともいえない。3：重要である。）で評定させ、さらに、32項目のうち物語作成のために特に重要だと思われる5項目を選択させる”というものであった。

### 手続き

日本では、学生が所属する大学の講義等を通じて大学生に、調査用紙を入れた封筒を1人につき1部ずつ配布し、期日を設け、協力できる学生に提出をもとめた。中国と米国での調査実施は、研究協力者に依頼し、ほぼ上記と同様の方法でなされた。

## 結 果

### (1) 重要度評定の因子分析

物語作成の際にどれくらい重要かを評定させた32項目の評定値につき、日本、中国、米国の学生のデータをあわせて、因子分析を行った（主因子法、スクリープロットにより因子数を決定（各因子の固有値はいずれも1より大きい）、プロマックス回転）。

日本、中国、米国のデータで共通して、あるいは、どれか1国、あるいは2国のデータにおいてのみ、3分の2以上の対象者が3もしくは1と評定している10項目を除外し分析を行った。共通性が0.16、因子負荷が0.35に満たない5項目を削除し、因子負荷が1つの因子について0.35以上で、かつ2因子にまたがって0.35以上の負荷を示さない17項目を選出した。その結果、3因子が抽出された（表1参照）。第1因子は、趣味、将来の希望、受賞歴、生き立ち、仕事内容、性格、配偶者の情報といった項目から構成されているが、これらはいずれも、履歴書やプロフィールに記入されることの多い内容であるため、「プロフィール・履歴書」因子と命名した。第2因子は、収入の高さ、十分な貯金、外見の若さ、夫の収入の高さ、優秀な学業成績といった項目から構成されているため、「成功者」因子と命名した。第3因子は、家族、先祖、近所づきあい、夫婦の関係に関する項目から構成されているため、「近親者との関係」因子と命名した。3つの因子間の相関を表2に示した。

---

<sup>2</sup>日本の大学生は、東京都内の4つの男女共学の大学、1つの女子大学、もしくは、長野県内の1つの男女共学の大学のいずれかに所属していた。中国の大学生の所属は、北京近郊の2つの男女共学の大学のいずれかであった。米国の大学生の所属は全員ワシントンD.C.郊外の1大学であった。

表 1 : 因子負荷

質問項目	因子		
	因子1	因子2	因子3
4.絵を書くのが趣味である	<u>0.51</u>	-0.11	-0.10
28.将来の希望は本を出版することである	<u>0.50</u>	-0.09	0.04
6.子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した	<u>0.48</u>	-0.15	0.06
9.IT 関連の仕事にたずさわっている	<u>0.47</u>	0.08	-0.14
5.人から注目されるのが好きである	<u>0.47</u>	0.06	-0.10
27.夫は高校の同級生だった	<u>0.45</u>	0.02	0.13
11.掃除をあまりしないので、部屋は散らかっている	<u>0.44</u>	0.02	-0.02
8.結婚している	<u>0.41</u>	0.11	0.09
13.収入は同年齢の人の中では上位である	0.10	<u>0.71</u>	-0.16
31.十分な貯金を持っている	-0.17	<u>0.65</u>	0.02
14.実際の年齢より若く見える	0.04	<u>0.51</u>	-0.06
15.夫には十分な収入がある	0.15	<u>0.49</u>	0.18
19.学校の成績は上位であった	-0.13	<u>0.45</u>	0.06
16.正月には家族が集まる必要があるとの考え	-0.22	0.07	<u>0.66</u>
12.先祖の墓参りや法事は大切だとの考え	0.00	-0.03	<u>0.48</u>
20..近所づきあいを大切にする	0.05	-0.08	<u>0.47</u>
18.夫と仲がよい	0.30	0.04	<u>0.44</u>

表 2 : 因子間の相関係数

因子	因子1	因子2	因子3
因子1	1.00		
因子2	0.33	1.00	
因子3	0.27	0.27	1.00

国別の因子ごとの平均因子得点は表 3 のとおりである。第 1 因子（プロフィール・履歴書因子）において、国間で有意差がみられた ( $F(2, 378)=32.9, p<.01$ )。第 2 因子（成功者因子）でも有意差がみられた ( $F(2, 378)=6.67, p<.01$ )。第 3 因子（近親者との関係因子）については、国間で有意差が認められなかった ( $F(2, 378)=0.88, p>.05$ )。

表 3 : 国別にみた因子得点の平均値

国	対象者数	因子1	因子2	因子3
日本	235	0.26	0.09	-0.02
中国	81	-0.35	0.01	0.11
米国	65	-0.49	-0.34	-0.04

性差も考慮に入れ詳しくみるため、因子ごとに、分散分析により2要因の効果(国、性別)を検討したので順に述べる。

因子1についてみる。国と性の主効果が有意であった(それぞれ  $F(2, 375)=31.30$   $p<.01$ ;  $F(1, 375)=4.81$ ,  $p<.05$ )。交互作用は有意ではなかった( $F(2, 375)=0.13$ ,  $p>.05$ )。国間の多重比較を行ったところ(Bonferroni法, 5%水準), 中国と米国の間には有意差はみられなかったが, 日本と中国, 日本と米国間に有意な差がみられ, 日本の得点が顕著に高い様子が伺える。

また, 細かくみると(単純主効果の検討), 各性において国間の差が有意であったが(男性での日中米差,  $F(2, 375)=14.22$ ,  $p<.01$ ; 女性での日中米差,  $F(2, 375)=17.45$ ,  $p<.01$ ), 国別の性差については, 日本においてのみ有意であった( $F(1, 375)=5.26$ ,  $p<.05$ )。図1で示すように, 日本の女性が一番高い得点となっている。因子1を形成するプロフィールに関する情報は, 日本でのみ重視されていることが示されている。

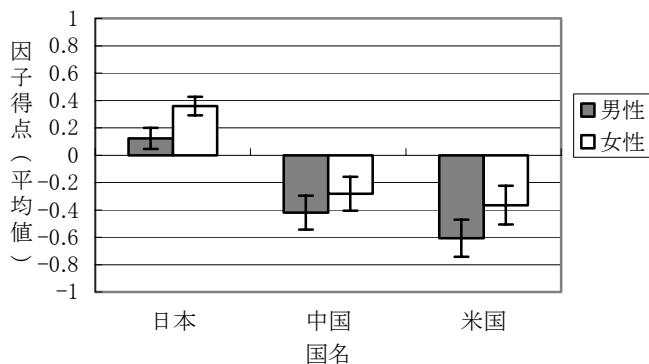


図 1 : 因子 1 の因子得点平均値 (国×性)

次に因子2についてみていく。国と性の主効果が有意であったが(それぞれ  $F(2, 375)=6.08$   $p<.01$ ;  $F(1, 375)=15.00$ ,  $p<.01$ ), 交互作用は有意ではなかった( $F(2, 375)=0.66$ ,  $p>.05$ )。国間の多重比較を行ったところ(Bonferroni法, 5%水準), 日本と中国の間には有意差はみられなかったが, 米国と日本, 米国と中国間に有意な差がみられ, 米国の得点が一番低かった。

また、詳しくみると（単純主効果の検討）、男性においては国間の差は有意ではなかったが（ $F(2, 375)=2.34, p>.05$ ）、女性においてのみ国間の差が有意であった（ $F(2, 375)=4.28, p<.05$ ）。国別の性差は、日本と中国で有意であったが（それぞれ  $F(1, 375)=10.67, p<.01$ ;  $F(1, 375)=8.84, p<.01$ ）、米国では有意な差はみられなかった（ $F(1, 375)=1.39, p>.05$ ）。因子2については、米国の得点が高国2国よりも有意に低く、女性で、特にその差が顕著であることがわかった（図2参照）。

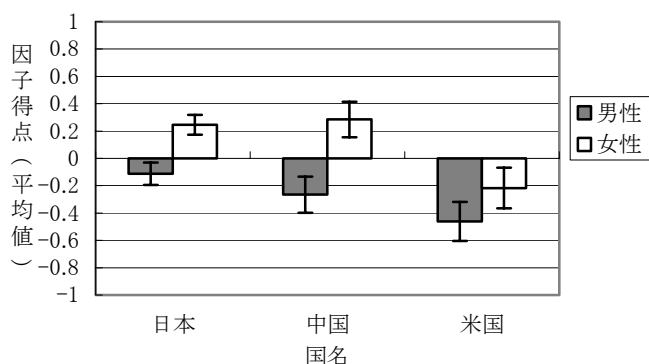


図2：因子2の因子得点平均値（国×性）

最後に、因子3についてみていく。国の主効果は有意ではなく（ $F(2, 375)=1.06, p>.05$ ）、性の主効果のみ有意であった（ $F(1, 375)=6.35, p<.05$ ）。交互作用は有意ではなかった（ $F(2, 375)=1.55, p>.05$ ）。国間の多重比較も検討したが（Bonferroni法、5%水準）、いずれの国間においても有意な差はみられなかった。

ただし、詳しくみていくと（単純主効果の検討）、日本と米国においては、有意な性差がみられたが（それぞれ  $F(1, 375)=7.39, p<.01$ ;  $F(1, 375)=4.92, p<.05$ ）、中国では性差は有意ではなかった（ $F(1, 375)=0.00, p>.05$ ）。因子3については、女性のほうが得点が高いことのみ確認された（図3参照）。

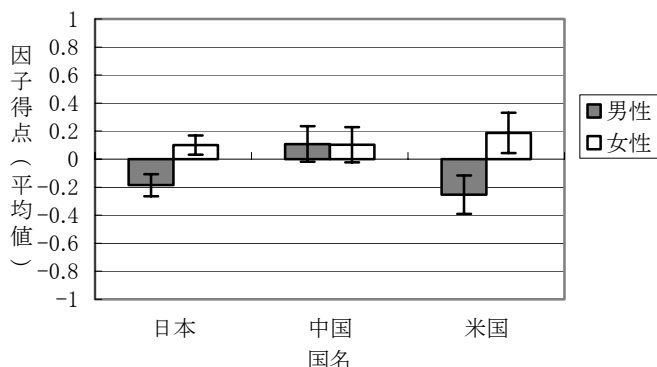


図3：因子3の因子得点平均値（国×性）

## (2) 個々の質問項目への反応でみられた違い

上記の因子分析の際に除外した項目においてみられた違いについて触れておきたい。

まず、日本で他2国より有意に重視されていた項目として、項目30（ときどきひどくふさぎこむ）、項目26（平凡に暮らすのがよいと思っている）、項目22（小型の犬を飼っている）、項目24（最近、エッセイコンテストで入賞した）があげられる。各項目につき、評定の比率の詳細を示したのが表4、表5、表6、表7である。項目30（ときどきひどくふさぎこむ）については、日本では6割強の人が「重要である」と評定したのに対し、米国において顕著に低い評定になっている（表4参照； $\chi^2(4, N=381)=37.3, p<.01$ ；残差分析では「日本の評定1」「日本の評定2」「日本の評定3」「中国の評定2」「米国の評定1」「米国の評定3」の6カテゴリーで $p<.01$ 、「中国の評定3」の1カテゴリーで $p<.05$ ）。項目26（平凡に暮らすのがよいと思っている）については、日本で「重要である」と評定している人の割合が5割近くと有意に高いのに対して、米国において軽視する傾向にある（表5参照； $\chi^2(4, N=381)=19.5, p<.01$ ；残差分析では「日本の評定3」「米国の評定1」「米国の評定3」の3カテゴリーで $p<.01$ 、「日本の評定2」の1カテゴリーで $p<.05$ ）。項目22（小型の犬を飼っている）、項目24（最近、エッセイコンテストで入賞した）については、日本においても「重要である」を選択する人の比率が顕著に高いわけではないものの3割前後の人が「重要である」と評定しているのに対して、米国では、それぞれ8割、7割の人が「重要ではない」と評定している点が注目される（表6、7参照；それぞれ $\chi^2(4, N=381)=45.4, p<.01, \chi^2(4, N=381)=33.1, p<.01$ ；項目22の残差分析では「日本の評定1」「日本の評定3」「米国の評定1」「米国の評定3」の4カテゴリーで $p<.01$ 、「中国の評定3」の1カテゴリーで $p<.05$ 、項目24の残差分析では「日本の評定1」「日本の評定3」「米国の評定1」「米国の評定3」の4カテゴリーで $p<.01$ 、「日本の評定2」「米国の評定2」の2カテゴリーで $p<.05$ ）。

表 4 : 項目 30 (ときどきひどくふさぎこむ) に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	11.5%	24.3%	64.3%	100.0%
中国	12.3%	43.2%	44.4%	100.0%
米国	33.8%	35.4%	30.8%	100.0%

表 5 : 項目 26 (平凡に暮らすのがよいと思っている) に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	19.6%	32.8%	47.7%	100.0%
中国	19.8%	44.4%	35.8%	100.0%
米国	35.4%	44.6%	20.0%	100.0%

表 6 : 項目 22 (小型の犬を飼っている) に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	36.6%	30.6%	32.8%	100.0%
中国	58.0%	23.5%	18.5%	100.0%
米国	80.0%	16.9%	3.1%	100.0%

表 7 : 項目 24 (最近, エッセイコンテストで入賞した) に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	40.4%	31.9%	27.7%	100.0%
中国	49.4%	39.5%	11.1%	100.0%
米国	73.8%	21.5%	4.6%	100.0%

次に、中国で他 2 国より有意に重視されていた項目をみていく。項目 1 (健康に注意している)、項目 25 (将来に希望をもっている)、項目 23 (きまじめである)、項目 2 (友だちに人気がある)、項目 17 (しっかり目標をたてて、人生を自分でできりひらいていきたいと思っている) がそれに該当する。各項目につき、評定の比率の詳細を示したのが表 8, 表 9, 表 10, 表 11, 表 12 である。項目 1 (健康に注意している) に対して、日米では 2, 3 割の人が「重要である」と評定したのに対し、中国では 6 割の人が「重要である」と評定し、中国においてこの項目がより重視されていることがわかる (表 8 参照;  $\chi^2(4, N=381)=37.75, p<.01$ : 残差分析では「日本の評定 1」「日本の評定 3」「中国の評定 1」「中国の評定 3」「米国の評定 3」の 5 カテゴリーで  $p<.01$ )。項目 25 (将来に希望をもっている) については、日米においても「重要である」を選択する比率が高いが (それぞれ 6 割, 7 割)、中国における「重要である」の選択率が 9 割近くと顕著に高くなっている (表 9 参照;  $\chi^2(4, N=381)=23.3, p<.01$ : 残差分析では「日本の評定 1」「中国の評定 3」「米国の評定 2」「米国の評定



3」の4カテゴリーで  $p < .01$ , 「中国の評定1」「中国の評定2」の2カテゴリーで  $p < .05$ )。項目23(きまじめである)については、中国において顕著に重視され、米国において軽視される傾向にある(表10参照;  $\chi^2(4, N=381)=64.3, p < .01$ : 残差分析では「中国の評定1」「中国の評定3」「米国の評定1」「米国の評定3」の4カテゴリーで  $p < .01$ )。項目2(友だちに人気がある), 項目17(しっかり目標をたてて、人生を自分でできひらいていきたいと思っている)については、いずれの国においても「重要である」という選択率が高い傾向にあるが、中国で特に重視されている(表11, 12参照; それぞれ  $\chi^2(4, N=381)=15.2, p < .01, \chi^2(4, N=381)=11.4, p < .01$ : 項目2の残差分析では「中国の評定3」「米国の評定3」の2カテゴリーで  $p < .01$ , 「中国の評定1」の1カテゴリーで  $p < .05$ , 項目17の残差分析では「米国の評定2」「米国の評定3」の2カテゴリーで  $p < .01$ , 「中国の評定3」の1カテゴリーで  $p < .05$ )。

その他、日中において項目10(数人の親友がいる)が米国より有意に重視されていること( $\chi^2(4, N=381)=18.9, p < .01$ ), 中国で項目7(先週、俳優にレストランで会いサインをもらう)が顕著に軽視されていること( $\chi^2(4, N=381)=9.58, p < .05$ )が示されている。

簡単にまとめると、日本では、より日常的な内容(ふさぎこむ, エッセイコンテストで受賞, 犬を飼っている, 平凡に暮らすのが良い)が重視されるのに対して、中国では、皆に評価されるような生きる姿勢のようなもの(健康に注意し, 将来に希望を持ち, 人生を自分でできひらき, まじめで, 友だちに人気)が重視され、米国においてのみ顕著に重視される項目は本項目内では見いだされなかった。

表8: 項目1(健康に注意している)に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	31.9%	37.9%	30.2%	100.0%
中国	7.4%	30.9%	61.7%	100.0%
米国	33.8%	44.6%	21.5%	100.0%

表9: 項目25(将来に希望をもっている)に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	10.2%	18.3%	71.5%	100.0%
中国	1.2%	12.3%	86.4%	100.0%
米国	4.6%	36.9%	58.5%	100.0%

表10: 項目23(きまじめである)に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	14.5%	31.1%	54.5%	100.0%
中国	1.2%	29.6%	69.1%	100.0%
米国	47.7%	30.8%	21.5%	100.0%

表 11：項目 2（友だちに人気がある）に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	13.2%	20.4%	66.4%	100.0%
中国	3.7%	17.3%	79.0%	100.0%
米国	15.4%	33.8%	50.8%	100.0%

表 12：項目 17（しっかり目標をたて人生を自分でできひらいていきたい）に対する評定の比率

	1:重要ではない	2:どちらともいえない	3:重要である	合計
日本	6.8%	17.4%	75.7%	100.0%
中国	2.5%	12.3%	85.2%	100.0%
米国	6.2%	30.8%	63.1%	100.0%

(3) 5 項目の選択でみられた違い

32 項目のうち物語作成のために特に重要だと思われる 5 項目を選択させた結果について最後にみていく。項目ごとに、選択数をそれぞれの国の対象者数で割ってもとめた比率を図 4 に表現した。(1)

(2) で述べてきた結果と類似している点として、因子 1 に関わる情報は日本での選択率が高いこと、項目 1（健康に注意している）、項目 2（友だちに人気がある）、項目 17（しっかり目標をたて人生を自分でできひらいていきたい）、項目 25（将来に希望をもっている）は中国で一番選択率が高いことがあげられる。それ以外で新たに示された、あるいは、(1) (2) の結果とは少し異なる形で示された結果について、触れておきたい。

項目 6（子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した）は (1) の因子分析では因子 1 を構成する項目となっており、日本において因子 1 が重視される傾向にあることを指摘したが、ここでは米国においても日本と同様に選択率が高くなっている ( $\chi^2(2, N=381)=12.82, p<.01$ )<sup>3</sup>。項目 16（お正月には、家族が集まる必要があると考えている）は (1) の因子分析では因子 3 を構成する項目となっており、特に国間で因子 3 への評定に有意差はみられなかったと説明したが、ここでは、3 国で選択率は低いものの中国において他 2 国よりも有意に選択率が高い ( $\chi^2(2, N=381)=24.24, p<.01$ )<sup>4</sup>。項目 21（仕事で成功した）については、3 段階の重要度評定の際には国間で有意差はなく、全般に高く評定される傾向にあったが、ここでは、米国で選択率が有意に高くなっており、特に米国で重視されていることがわかる ( $\chi^2(2, N=381)=13.84, p<.01$ )。項目 30（ときどきひどくふさぎこむ）については、3 段階の重要度評定の際には、日本で顕著に高く米国において有意に低かったが、ここでは、米国においても日本と同様に、中国よりも有意に高く選択されていた ( $\chi^2(2, N=381)=11.44, p$

<sup>3</sup> 項目 6 への評定値ごとの選択比率でも日本について「重要である」を選択する割合が高かった（「重要である」を選択した比率は、日本で 64.3%、中国で 29.6%、米国で 56.9%： $\chi^2(4, N=381)=33.57, p<.01$ ；残差分析では日本のすべての選択カテゴリー、中国でのすべての選択カテゴリーが有意）。

<sup>4</sup> 項目 16 への評定値ごとの選択比率でも中国において「重要である」を選択する割合が他 2 国よりも有意に高かった（「重要である」を選択した比率は、日本で 28.1%、中国で 55.6%、米国で 35.4%： $\chi^2(4, N=381)=27.89, p<.01$ ；残差分析では日本と中国の「重要である」「重要ではない」の 4 カテゴリーが有意）。

<.01)。

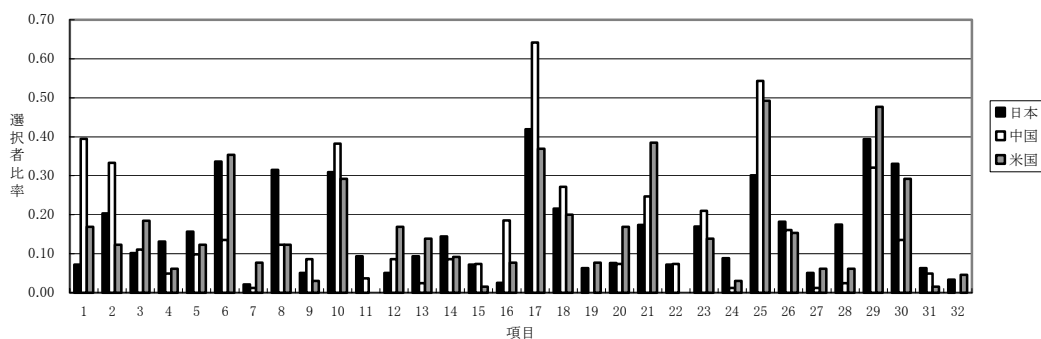


図4：5項目選択課題における選択者数の比率

## 考 察

以上のとおり、物語作成の際に、日中米の学生が重視する主人公の特徴に、国間で違いがあることがわかった。因子分析において性差も検討したが、主人公が女性であったためか、中国における因子3に関わる評定を除き、どの国においても全般に女性のほうが男性よりも高く評定する傾向にあった。細かくみていくと様々な差はみられるものの、国間の差について次のようにまとめることができるだろう。

因子分析により、「プロフィール・履歴書因子」は日本において他2国よりも有意に重視され、「成功者因子」は日中において米国よりも有意に重視されていることが明らかとなった。また、因子分析以外の結果として、日本では、主人公の日常に関する内容が重視され、中国では、皆が認めるようなポジティブな生きる姿勢に関する内容が重視される傾向にあることが示された。日本においては、主人公に関する多方面にわたる人となりの情報の記述をもとめ、中国では、主人公といえれば前向きで欠点がなく成功している人物像を思い描くのかもしれない。なお、米国のみ顕著にみられる特徴は今回ほとんど見出すことはできなかった。米国において若干みられた特徴として、他の2国より「仕事に成功した」を重視する傾向にあったこと、日本と同様に、項目6（子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した）を重視する割合が中国より高かった点があげられる。

日本において日常に関する内容が、中国ではポジティブな生きる姿勢に関する内容が重視されるという結果は本調査に限定されるものではなく、向田・東(2005)でも類似する結果が示唆されている。向田・東(2005)は、10年後の将来展望についての記述を日中の学生とその親にもとめ、中国では前向きな姿勢や具体的な仕事内容に言及する記述が多かったのに対して、日本では日常生活に関する記述が多い傾向にあったと説明している。

本調査結果で注目すべき点は、似通った日中の反応パターンから、米国がかけ離れた特徴を示したわけではなく、日本と中国の間でも顕著な違いが複数みられたことにある。西洋と東洋という安易な

二分法の視点だけからでは十分に説明しきれないことを示唆していると思われる。同様の示唆は、将来展望の記述を検討した向田・東（2005）や真島・東（2006）、過去の努力の記述を調べた高崎・東（2006）、また、線画に関する母子の語りを調べた柿沼・上村・静（2006）でもみてとれる。

映画、ドラマ、漫画、アニメなどを通じて、特に日本、中国、米国の間で共有する物語数は増える傾向にあるため、この3つの文化の間では物語の嗜好に差がなくなったかというそうではなく、実際には、好まれる話の展開や期待する主人公の記述のされ方に、3つの集団文化間で違いがあることが、本調査結果において示唆された。ただし、現段階では、主人公がどう描かれるべきかの期待についての三文化間での違いとその背景にある要因の詳細については不明である。今後、米国のデータを中心にデータを補強し、分析法と質問項目の改良、新たな調査の実施も視野に入れ、さらに追究していく必要がある。

## 引用文献

- 東 洋（2003）日米比較研究ノート—文化心理学と異文化間比較— 発達研究, 17, 107-113.
- Azuma, H. (2006) The Era of Fluid Culture: Conceptual Implications for Cultural Psychology. Proceedings of 2004 International Congress of Psychology. Washington, D.C.: Psychology Press. (Paper presented at the International Congress of Psychology, 2004, at Beijing)
- 柿沼美紀・上村佳代子・静進（2006）文化的学習としての母子の語り（1）—日本・中国・米国における非言語的情報選択— 発達研究, 20, 13-22.
- 河合隼雄（1982）昔話と日本人の心 岩波書店
- 真島真理・東洋（2006）将来の一日の予想と、過去の努力の回想にみられるライフ・スクリプトの日米比較 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト」. 95-115.
- 向田久美子・東洋（2005）10年後の将来像—日中比較の中間報告— 発達研究, 19, 29-46.
- 小澤俊夫（1976）日本人と民話 ぎょうせい
- 上原泉・東洋（2005）物語作成の際に重視する項目は何か—日中比較の中間報告— 発達研究, 19, 55-64.
- 高崎文子・東洋（2006）「努力したこと」についての回想的記述の分析：日中比較 発達研究, 20, 55-66.

## 謝 辞

質問項目作成にあたり、ご助言をいただいた柏木恵子先生、柿沼美紀先生、向田久美子先生、高崎文子先生、フォン・アイピン氏に深く感謝いたします。中国における調査実施にご協力いただいた、張厚榮 (Zhang Houcan) 先生、Xiaomin Sun 氏をはじめとする北京師範大学の大学院生の皆様にも心よりお礼申し上げます。また、アメリカにおける調査実施にご協力いただいた David S. Crystal 先

生にも厚くお礼申し上げます。

## 付 記

本研究は、文部省科学研究費補助金 基盤研究（B）「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」（研究代表者：東 洋），および、（財）発達科学研究教育センターの研究委託を受けて実施された。

